

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Oct. 30th, 1958, No. 320.

關西大學學報

昭和33年10月 第320号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十三年十月三十日発行(毎月一回三十日発行)
通卷三二〇号



学園祭ポスター

大学祭ポスター

關西大學出版部

移民母村の過去と現在

——和歌山県東牟婁郡太地町の実態調査を終えて——

市原亮平

経済学部 助教授

(一)

本学理事会をはじめ、諸先生方の精神的経済的援助

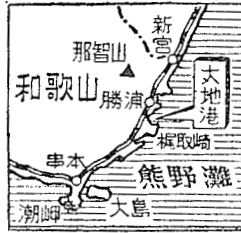
をいただいで、七月十四日から三日間の予備調査と八月二十七日から月末にいたる本格調査を首尾よく終へることができ、移民母村の一典型の過去と現在の全姿を大難ながら認識することができたのは幸であった。予備調査地は、紀勢西線御坊駅から約十軒の距離にあり南は紀州灘にのぞみ西方は四国に対し南方遠く太平洋につらなる「アメリカ村」と和歌山県日高郡三尾部落と太地町。本格調査地は紀伊半島の南端、和歌山県と三重県の境に近い新宮町から西に四十分勝浦町の次の駅太地を降りてバスで十五分程行くと到着する和歌山県東牟婁郡太地町であった。予備調査地と本格調査地をきめるまでの経緯は関西大学新聞一四五号にやゝくわしく書いておいたから省きたい。学生二十名と本格調査前に二日をついやして真剣な研究討論会を催し、わたくしたちの調査目的と調査方法を確定しておいた。共通分母として折出できた調査目的は次のようなものであった。

(1) 移民の発祥地である和歌山県にあつて、過去においてもつとも移民量の多い母村をとらえ、移民や出稼ぎを必然化した経済構造がどのようなものであつたか、又現にどのようなものであるか、を歴史的にあきらかにすること。

(2) それには人口圧力をはげしくした漁業構造——言葉をかえていうと漁業における封建性とそれら堀りくずしていつた資本主義の発達とを立体的にあきらかにし、漁民内部における階層分化と停滞的潜在的失業人口の流出とを歴史的にあきらかにすること。

(3) 移民・出稼ぎの母村にあつた経済的効果を歴史的に評定し、現代資本主義の法則的作用のもとにおける漁民出稼ぎ・移民や産児制限運動の改良的效果を判定し、脱漁民化の行途を見きわめること。

このような共通な調査目的を集約してゆくまでの調査者各人の学習は大変なもので、封建性とは何か共同体とは何か、マニユ漁業とは何か、漁業の資本主義化には農業のそれのようにアメリカ型とプロシヤ型の二つの途の対抗を考へることが出来るか、「見えない」失業人口を計測するにはどうしたらよいか、等々相互の闘論を活潑につみかさねたわけである。



さていよいよ調査目的を確定しておいて、本格的調査地東牟婁郡太地町が日本の移民県においても典型的な移民地帯であるゆえんを予備調査してみた。明治三十年から昭和十五年にいたる県の海外渡航旅券下附者数をみてみると次のようである。郡別にみてもつとも多くの移民を送つた東牟婁郡においても、とりわけ沿岸

地帯に移民がさかんで下里町、太地町、大島町、那智町、古座町、勝浦町はその有数なる市郡別

市郡別	総計	地帯に移民がさかんで
和歌山	3,112人	下里町、太地町、大島
海草郡	9,252人	
伊都郡	5,620人	
那智郡	1,766人	
田高郡	2,014人	
西牟婁郡	10,033人	
牟婁郡	12,058人	
東牟婁郡	16,058人	

同郡の海外移民総数は計四、七七八人、海外出生者の郷里に滞在せるものの数は計四八八八人に及んでおり、下里町の七五一一人、太地町の六八一一人が移民数の最も多いものとなつてゐる。移民出先を個別にみると北アメリカの二、二八八人は県下第一位で移民総数の約半分を占めており、ブラジル移民もさかんであつてその数八四四人、満州国の四四八八人、カナダの三四四人、蒙州の二二二人、比島の一九七人、メキシコの二〇三人等であつて、太地移民は主に北米、カナダ、蒙州向けであつた。さてこれからの移民・出稼母村のうち、(一)漁業を主収入とする太地、勝浦、古座町のような漁場地。(二)漁業収入を主、農業収入を従とする大島(こゝは満州移民一七〇人を送出した)、田原村のような半漁半農地。(三)林業収入を主とし農業収入これにつぐ那智町のような山農地。(四)水産と農業収入とがほとんどあい等しい下里町のような半漁半農地。(五)林業収入を主とする高田、色川村のような林業地帯。——以上のごとく五分されるが、わたくしじしんの関心からしてもすでに純農村と純山村の経済構造とそれがもたらした出稼・移住状況については数度の調査行と論稿の発表をかさねているし、ひろく農業経済学や林業経済学をみわたしてもかなりの先進的業績が出てゐるので必然になお未開拓とかんがえられる漁業経済学への一考を兼ねて、人口問題調査のための太地行えとおもひかざるをえなかつた次第である。以上のような問題及

び方法意と予備知識をもつてわたくしたちは台風一過直後の南紀のまだ傷跡の生々しい情景を、空と海の青さと対照的に重苦しく窓外にみながらひたすら南下していた。

(二)

紙紙は限られるので、重点的に本格的調査の報告をおこないたい。わたくしたちは二つにわかれ、一は歴史班となつて太地移民と漁業構造の過去をたづね、一は現在班となつて戦後より現在にいたる人口問題の現状分析に主力をそそぎ、前者は学研の諸君、後者は私のゼミの諸君があたり、わたくしは主に前者に従いつつ、山下清のいう小隊長なみの仕事をおこなつた。したがつて、まづ歴史班がもたらした貴重な探査の成果の要点を太地史といふかちで述べてみたい。

この太地は郷土史家で明治末期は尖鋭な社会主義者たりし庄司海村氏の説をきくと、すでに鎌倉時代は和田義盛の一族によつて開かれそれまでの現住民はその支配に服した、という。以来先住土豪の泰地家と共存して漁業をいとなみつゝ水軍の統率者として威をほこつたとき。しかし太地が国中に知られるようになったのは、突取式捕鯨の発生地としてであり、日本捕鯨史上忘れ去るべきぬ意義をもつた地である。建保の初年にこの地で和田義盛は鎗・長刀・弓箭等の武器を用いて捕鯨をおこない、さらに慶長十一年にはその捕鯨法をすゝめ鎗突法とし、鯨組五組を設けたという。これらの諸法に代つて網取法が発案されると捕鯨も大きな躍進をとげ、こゝ太地を網取法の発祥地として本格捕鯨は土佐・肥前や東海・東山・山陽・南海・西海にひろがつていつたわけである。網取法は明治初年に洋式捕鯨法によつて駆逐されるまでは本格捕鯨のすゝんだ技術としてひきつがれた。

網取式捕鯨は、封建的村落構造を基盤としつゝ山見・勢子・網役・運搬・納屋等を世襲的な部分労働として組織し、山壇那のきびしい統制のもとにおいた和田家の力によつてひきつがれ、鯨組組織によつて遂行された。すなわち一鯨組四百名余の加子、漁夫が数組に分れて編成され大規模なマニユファクチュア漁業が展開されたのであり、このように組織された漁民はヒエラルヒーをなして和田家に支配され扶持米を給与されていた。この数組の鯨組の部分労働の世襲はこんにちも太地各地区に多く点在する網野、勢子、箭師、漁野等の職能別の同姓となつて痕跡をのこしている。和田一族が五家に分れて村落構造の頂点にたち加子・漁夫を家中としてその貢租・年貢をすべて領主権力に請負つて納めてやることもに紀州藩のバック・アップによつてかれらを「経済外的強制」下に支配していたかぎり、鯨組がいとなむ捕鯨は典型的な封建漁業（封建的マニユ）であつたといえよう。

さてこの旧式捕鯨業が明治維新後の日本社会の転変にたえて長くその余命を伸ばしえないことはいうまでもないが、その凋落は以外にも明治十一年暮れの遭難事件によつておとづれたのである。すなわちこのとき、捕鯨の禁忌とされてきた子持のセミ鯨を追つた鯨組百数十人は時化にあつて青壮年労働力と装備とを一挙に失い、悲嘆のうちに漁民の和田族にたいする積年の不満は激発して鯨組は封建漁業とともに解体をとけてしまつた。和田一族による太地捕鯨の再起は何度も図られたが成功をみず、明治二十二年にすべての権利を東京の松平氏に譲つて太地漁業の核心——鯨組はついで本方と水夫とをつないだ扶持米制度も消え、往時の名残りはわずかに日本郷土芸能史上に特徴ある鯨踊りにみられるのみとなつた。（恰度わたくしたちが

調査に従つているとき、鯨踊りは日本郷土芸能研究会によつて取材され宝塚歌劇の民族舞踊第一集紀南篇として興行されていた。この旧式捕鯨——封建漁業の廃滅は漁民の身分的独立と捕鯨以外の一般漁業への依存度を高めたが、かれらが餓死を免れるためには封建的マニユに代るべき資本制マニユ漁業や機械漁業の傘下にはいることが必要であつた。しかし村落内部における原始的資本の蓄積は取るに足らず、比較的大規模の資本を要する鱒敷等は村落外の資本の導入に俟たざるをえず、網代（定置網中最も小規模のもの）だけが地元漁民の手に残されてあとは明治三十年前後にやつてきた九州の外來資本家日高氏、やがては伊丹氏にその定置網権をゆだねて、漁民は全般的に窮乏の淵に立たされていつた。かくて漁民の郷土を捨てての北米や蔡州めあての「蒼氓」の歴史が切つておとされる。

(三)

さて視座を一転して現在班がつみとつた成果より太地の現況をみてみよう。町の人口は昭和三十二年十二月現在で四、六三五人、戸数にして一、一一五戸である。このうち漁業に従事するもの三四二戸（三一％）でもつとも多く、自由労働者（二〇％）、農業（一五％）、商業（一一％）がこれについている。生産額のうちでも水産業は全体の六割を占め七、二九〇万円にたつし（うち鯨が七四二万円を占めるが）、農業の一、二一〇万円、製造業の二、七五〇万円、林業の三〇〇万円をはるかに凌いでいる。しかも主な収入源としての漁業もかなり小規模のもので典型的な零細沿岸漁業の町と考えられ、そのことは漁業センサス結果表に拠つた左の太地の経営体数・従事者数・漁船数（昭和二十九年）をみればわかることである。

結論をいそがなければならぬ。こゝ太地において

も概況ですでに触れたとおり、全国どここの沿岸漁村にあつてもみられる沿岸漁業のはなほだしい不振と沖合遠洋漁業をいとなむ外の漁業独占資本の優位―前者の沈滞化と完全・不完全失業者の増加という傾向は貫徹している。しかし三尾村のように隠居部落に化するほどのまつたくの脱漁民化―無力化という状況は現在にかぎるとなみられない。その方向性においてはあまりなく「アメリカ村」―三尾部落的隠居部落化に向けて指向しているにせよ、現在班が太地内の典型的な漁民の部落小東の全戸調査をおこなつたかぎりでは、総調査戸数一七七戸中「上層」は一・八〇（漁業経営者二、その他の自営業者三、移民・出稼者一、漁業労働者十五、その他なし）、「中層」は五四・八〇（漁業経営者二、その他自営業者六、移民・出稼者十一、漁業労働者五八、俸給・賃労働者十七、その他一）

シカゴ通信 (1)

拜啓秋冷の候皆様には益々御健勝の御事と存じます。さて、この度小主アメリカシカゴ大学留学に關しましては一方ならぬ御高配を賜りましたこととありがとう御座いました。御蔭を以ちまして去る十月一日神戸を無事出発することができ、今日より五日前の十七日目的地たるシカゴに到着致しました。直ちにシカゴ大学において登録手続を開始し、昨日より正式に講義に出席しております。少しは通ずるだらうと思つていません。私の英語はさつぱり駄目です。役に立ちません。でもこれだけは今いくら悔んでみましてもどうにもならず、とにかく一刻も早く環境に慣れ、折角与えられたこの一年間の機会を有意義に過すべく覚悟を新たにしております。何卒今後共御指導御鞭撻賜りますようお願い申し上げます。インターナショナル・ハウスに私も止宿しているのであり

「下層」は三三・三三〇（漁業経営者四、その他の自営業者二、移民・出稼者三、漁業労働者十九、俸給・賃労働者十四、その他十四）という階層分化の緩衝化がみられ、「上」「中」層が相対的に多いことが注目される。このことが移民希望世帯が全体の一・六〇という低率に止められる明治年代における圧倒的な移民希望とは対照的な現況ともなつて反映しているのである。近鉄資本の導入によつて三尾村なりに観光地化することによつて沿岸漁業の荒廃と脱漁民化の方向を打開しようという太地町の現在が、ともかくも三尾村のように完全に隠居―荒廃部落化していない秘密は「二」において介間みた太地漁民の過去の事業のうちにひそんでいよう。そしてこの秘密をときあかすために明治十一年の鯨組の解体後の食えない人口圧力のためはじめて海外渡航に（ルソン島の街道工事徴発移民と

ますが、食事が比較的高くてまづいのを除けば非常に住みやすいところだと、今のところは思つています。

同ハウスには日本からの方が十数人見えておりますが、大阪一人、名古屋二人、九州二人、東北一人、東大一人、小樽商大一人、農林省一人その他で、私立大は私一人です。助手の身分で来ていますのは勿論私一人で、その点大いに気を強く致しております。まだなにかとすることが多く、市内に出ておられます。そのうちに諸々を見学し見聞をひろめるつもりでございます。シカゴの秋は早く、大学構内の小径は落葉さかんですが、それを見るにつけ、千里山学舎の秋を憶い出し感慨一入です。

右取敢ず到着報告かたがた心から厚く御礼申し上げます。

遥か皆様の御健勝をお祈り申し上げます。 敬具

昭和三十三年十月二十二日 上田 昭三

第2表 太地の経営体数・従事者数・漁船数(昭和29年)

	経営体数	従事者数			漁船数	
		総数	家族	雇用人		
総無動力	52	396	64	332	70	
有動力	11	14	13	1	16	
有動力	1ト以下	4	7	7	1	4
	1~3	20	52	30	22	23
	3~5	—	—	—	—	—
	5~10	2	11	3	8	2
	10~20	4	29	5	24	4
	20~30	2	35	3	32	4
	30~100	7	166	2	164	12
100~200	2	82	1	81	5	
200以上	—	—	—	—	—	

して)出向いた明治十八年の昔から、幸徳秋水の一味として大逆事件に連累して危ふく処刑を免れた庄司氏や橋本竜氏の努力によつて外来資本家伊丹氏の漁場権を奪回し自治体社会主義ともいべき水産共同組合を設立するのに成功した大正中葉、さらには戦後―毎年秋大洋漁業を中心とする南極捕鯨団の出港時には三〇〇人をこえる砲手・航海士・操舵手・甲板員を送りこみ約半年間に一人当り平均四、五十万円を取つてかえるという現在にいたる間の、いはば太地近代史なるものゝ解明が必要であるうがもはや紙幅がない。これらの諸点については関西大学経済論集近号に掲載される別稿を参照していただければ幸甚である。

さいごに本調査に御支持をたまわつた学内の諸先生和歌山県移民課や太地町の行政・経済団体幹部の各位さらには熱心に調査に参加した本学の学生諸君に心からの謝意をあらわして筆を擱くことにしたい。なお本稿の主旨で私じしん十一月十日の農村人口問題研究会で報告を行ったことを附記しておく。

(昭和三十三年十月十九日記)

学内報

定例評議員会

学校法人関西大学寄附行為第十八条第二項により定例評議員会を、十月二十五日(土)午後三時より、天六学舎において開催。左の諸案件につき審議された。

一、昭和三十三年度学校法人関西大学収支補正予算案に関する件

二、関西大学経理規程制定に関する件

三、財産得喪に関する件

1 千里山学舎隣接地買収の件

2 関大会館建設予定地内の不用建築物処分の件

四、特別会計新設に関する件等

出席者(敬称略・五十音順)

- 阿部 甚吉 池田信之助 越智此古市
- 大小島真二 大島 武夫 大森 俊次
- 岡野 衛士 樫本 信雄 門上 敏夫
- 神宅賀寿恵 寒川 喜一 川口 勇
- 小寺小市郎 小林 巖 佐伯 五郎
- 白川 朋吉 関 豊馬 竹沢喜代治
- 中石 清一 中務 平吉 長柄 金吾
- 浪江 源治 西村治三郎 西本 寛一
- 東浦 栄一 久井 忠雄 平井 三朗
- 深川 実 本多 喜慶 堀 正人
- 松原 藤由 水谷 揆一 宮崎 平
- 三好 万次 村尾 静明 村上 精三
- 矢野 文雄 山崎 敬義 横田 健一
- 吉田 一郎 吉富 二郎

四学部長改選

四学部長の改選は、九月の四学部教授会においてそれぞれ選出され、十月一日付理事会にて任命された。

- 法学部長 和田 豊二教授
 - 経済学部長 矢口孝次郎教授
 - 文学部長 上道 直夫教授
 - 商学部長 山崎 紀男教授
- なお学部長代理には、桜田晋(注)、松原藤由(註)、藤本是(文)、川元英二(商)各教授がそれぞれ選ばれた。

新学部長略歴

和田豊二学部長
昭和三年本学法学部法律学科卒。本学講師、助教授、教授、関西甲種商業学校長、関大第二商業学校長、法学部次長、法学部長、短大部長。

矢口孝次郎経済学部長

昭和二年東京商科大学卒。本学講師、助教授、教授、経済学部長兼法学部長、学生課長、経商学部長、短大部長、大学院兼務、大学院経済研究科幹事、同部長、経済学博士、現理事。

上道直夫文学部長

昭和六年東大文学部独逸文学科卒、本学講師、教授、文学部次長、文学部長。

山崎紀男商学部長

昭和六年ミュンヘンベルグ大学社会科学科卒。山口高商講師、教授、神戸高商に転任、本学講師、教授、商学部長代理。

学内協議会協議員更迭

さきに発足した学内協議会協議員のうち、各学部長更迭に伴い、同協議会規定第二条の二により、左の通り一部更迭が行われた。

- 法学部 教授 和田 豊二 (法学部長)
- 教授 植田 重正 (一年議員)
- 経済学部 教授 矢口孝次郎 (経済学部長)
- 教授 三谷 友吉 (一年議員)
- 文学部 教授 上道 直夫 (文学部長)
- 教授 壺井 義正 (一年議員)
- 商学部 教授 山崎 紀男 (商学部長)

人事異動

昭和三十三年九月三十日付

- 任期满了につき法学部長を解く 教授 中谷 敬寿
- 任期满了につき法学部長代理を解く 教授 桜田 晋
- 任期满了につき法学部長代理を解く 教授 壺井 義正
- 任期满了につき文学部長を解く 教授 藤本 是
- 任期满了につき文学部長代理を解く 教授 三谷 友吉
- 任期满了につき経済学部長を解く 教授 高木 秀玄
- 任期满了につき経済学部長代理を解く 教授 安田 信一

- 任期满了につき商学部長を解く 教授 山崎 紀男
- 任期满了につき商学部長代理を解く 教授 田中 晋輔
- 任期满了につき工学部長を解く 教授 太田 雞一
- 任期满了につき工学部長代理を解く 教授 福島 四郎
- 任期满了につき大学院法学研究科幹事を解く 教授 和 田 豊二
- 任期满了につき法学部長を命ずる 教授 桜田 晋
- 任期满了につき法学部長代理を命ずる 教授 上道 直夫
- 任期满了につき文学部長を命ずる 教授 藤本 是
- 任期满了につき文学部長代理を命ずる 教授 矢口孝次郎
- 任期满了につき経済学部長を命ずる 教授 松原 藤由
- 任期满了につき経済学部長代理を命ずる 教授 山崎 紀男
- 任期满了につき商学部長を命ずる 教授 川元 英二
- 任期满了につき商学部長代理を命ずる 教授 田中 晋輔
- 任期满了につき工学部長を命ずる 教授 太田 雞一
- 任期满了につき工学部長代理を命ずる 教授 木村 健助
- 任期满了につき大学院法学研究科幹事を命ずる 教授 木村 健助

事務機構改革

過去数年間に著しく発展した大学の規模に応ずる事務機構の改革は各方面より要望されていたが、その構想が熟したので、九月十六日(火)の理事会で「関西大学事務組織規程」を制定し、これに基づき事務機構の改革が十月一日(水)付にて実施された。

これに伴う局、課の新設及び改廃のため、人事異動が行われた。(異動した人事については別項参照)

なお、今回の事務機構の改革は去る昭和二十二年六月二十六日理事会決議による改正以来である。

学務局新設

局長に池田信之助氏

「事務組織規程」に基づき、新に学務局が新設された。学務局は庶務課と教務課とに分れ、それぞれの事務を分掌することになった。

局長には池田信之助氏(前法文教務課長)が補せられ、また庶務課長に里見復二氏教務課長に森浩志氏が命ぜられた。

昭和三十三年九月十九日付

参事 池田 信之助

学務局長に補する

主事 安井 章吾

秘書室長を命ずる

主事 羽野 堅二
庶務課長兼出版課長を命ずる
書記 田中 一郎

庶務課長を命ずる
主事 水野 三郎

庶務課長を命ずる
書記 中山 敬

庶務課長を命ずる
(嘱託) 今村 勤

庶務課長を命ずる
書記 松本 長右衛門

庶務課長を命ずる
書記 片岡 権治郎

庶務課長を命ずる
書記 松本 俊

庶務課長を命ずる
書記 里見 復二

庶務課長を命ずる
書記 森 浩志

庶務課長を命ずる
書記 鉄井 良男

庶務課長を命ずる
書記 金田 雅一

庶務課長を命ずる
書記 鈴木 木竜男

庶務課長を命ずる
書記 山影 耕作

庶務課長を命ずる
書記 坂部 正武

庶務課長を命ずる
書記 元長 栄

庶務課長を命ずる
書記 若林 茂信

庶務課長を命ずる
書記 井内 雄二

主事 平井 三朗
工学部事務長を命ずる
書記 中村 富夫

庶務課長を命ずる
書記 木戸 一郎

庶務課長を命ずる
書記 有福 健

庶務課長を命ずる
書記 大山 綱憲

庶務課長を命ずる
主事 天野 敬太郎

庶務課長を命ずる
書記 伊藤 保

庶務課長を命ずる
(嘱託) 合田 熊平

庶務課長を命ずる
書記 且 菊男

庶務課長を命ずる
書記 須賀井 秀夫

主任に任ずる
昭和三十三年十月一日付

主任に任ずる
昭和三十三年十月一日付

主任に任ずる
昭和三十三年十月一日付

主任に任ずる
昭和三十三年十月一日付

主任に任ずる
昭和三十三年十月一日付

主任に任ずる
昭和三十三年十月一日付

主任に任ずる
昭和三十三年十月一日付

主任に任ずる
昭和三十三年十月一日付

書記 河野ツヤ子
書記 中村ゆき路
書記 淡野 明子
嘱託 宮脇慎三郎
庶務課長人事課
書記 坪内 貫
書記 小谷 正守
庶務課長企画調査課
書記 野原 博
見習 中原 淑子
庶務課長友誼課
書記 秋山 剛
書記 横山 茂昭
書記 勢井 かう
庶務課長出版課
書記 田村 桂一
庶務課長庶務課
書記 山中 林三
書記 多田 幸子
見習 片倉 節子
見習 岸上 文子
庶務課長庶務課
書記 山路 貞蔵
書記 北岡 栄一
書記 平野肯宜武
書記 三宅 セイ
書記 山下喜久子
書記 川合 絹江
書記 宮脇喜美江
書記 山田 輝彦
庶務課長庶務課
書記 中浜 道彦
書記 平井 進
書記 富田 兼子
書記 郡司 英雄

書記 細部栄三郎	書記 美崎 良史	書記 松家 繁一	書記 岡田 武司	書記 神屋敷志津	書記 坂井 健祐
書記 阪口 辰夫		書記 浜瀬 善雄	書記 水野 治	書記 図書館図書課	
事務局庶務課		書記 上田 稔	書記 水口 博喜	書記 万里小路通宗	書記 森川 彰
書記 天野美津子	書記 坂本 学	書記 吉原 稔	書記 原納 達之	書記 田熊渭津子	書記 井村 昌子
書記 一柳 玲子	書記 北村 博	書記 武田 正夫	書記 明石 和美	書記 三島 宜子	書記 国井 邦子
書記 石原 壮	備員 八鳥千鶴子	書記 中筋万里子	見習 竹内 豊子	書記 多治比郁夫	書記 村上 一
書記 棚田ひさの	書記 高田 静子	学部経済学部・商学部事務室	見習 豊子	書記 山口 克子	書記 吉川 直
書記 宮井 光子	書記 松本 秀子	書記 中山 義一	書記 柏原 保祐	書記 吉田めぐみ	書記 青木 道子
事務局教務課		書記 堀内庄右衛門	書記 竹崎 明夫	見習 足立 共子	書記 林 繁
書記 佐伯 博臣	書記 吉村 安夫	書記 東 元治	書記 三浦 洋子	書記 藤本 竜三	書記 大橋 勲
書記 井上 順一	書記 藤田 豊蔵	書記 睦好 貞子	書記 山崎 節	書記 今村 嘉之	書記 浅野 喜弘
学生部学生課		書記 今村 公子	書記 村田 力	書記 竜神 市蔵	見習 水田 宮子
書記 山村 彰	書記 大野 泰祐	事務 福留 祥子		書記 中島 良子	書記 高橋 喜
書記 上山 喜雄	書記 原田 正勝	学部工学部事務室	書記 毛尾 泰三	書記 山口 辰男	書記 小谷 信隆
書記 岩下 欣也	書記 芳田 文子	事務 山下 正隆	書記 毛尾 泰三	書記 横田 育子	書記 大浦 まさ
書記 船津美弥子		見習 津田 勇太	見習 鶴野 克彦	第一中学校事務室	書記 池田 みつ
学生部厚生保健課		書記 安宅 雅夫	書記 内田 兼俊		
書記 辻見 重行	書記 小幡 務	書記 福田 秀直	書記 朝重 敏		
書記 郡司 忠義	書記 吉田 尚	書記 藪本 秀夫	書記 齋藤 博		
書記 田中 豊子		備員 深田 礼子			
学生部第二学生課		書記 中江 巽	書記 阪本 竜三		
主任 田中治良太夫	書記 山脇 智	書記 伊勢 計典	書記 山本 泰正		
書記 水野 富蔵	書記 高瀬 欣和	書記 田尾 馴次	書記 大和 稠		
書記 小笠 公士	書記 田村 晃	職員 稲置 啓一			
書記 横田美寿子		大学院事務室			
就職部就職課		書記 中川 実	書記 植田 敬子		
書記 赤松 祐玄	書記 酒井 彦一	図書館 運営課			
書記 船引潤一郎	書記 松本 有司	書記 小西愛之助	書記 渡辺 五郎		
書記 安東 武夫	書記 安原 安雄	書記 上之山慶一	書記 武藤 葉吉		
書記 村山 弘	書記 工藤 五郎	書記 藤井 収	書記 宇貞 登		
書記 盛 清子	書記 西川 夏生	書記 齋藤 正路	書記 木下 正信		
嘱託 村上 仙三					

ニวยอร์ก大学

フック博士講演

ニวยอร์ก大学ワシントン・スクエア教養学部哲学教授シドニー・フック博士 (Dr. Sidney Hook) は、十月六日(月) 本学千里山学舎を訪れ、午後零時三〇分より約二時間に亘り、左の演題の下に討議形式により、蘊蓄を傾けた。
演題「マルキシズムについて」



司法試験等合格者

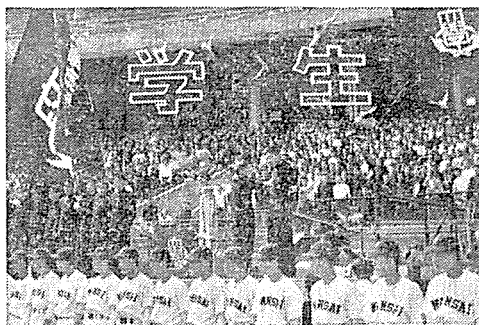
毎年東都諸大学とその数を競って優秀な成績を示している司法試験合格者は本年度左の諸君が栄冠をかち得た。

- 黒田 充治 (昭16二法卒)
- 東野 俊夫 (昭23専二法卒)
- 重村 和男 (昭30二法卒)
- 宇津呂 雄章 (昭30一法卒)
- 近藤 寿夫 (昭30一法卒)
- 原田 甫 (昭33二法卒)
- 得津 正熙 (昭32一法卒)
- 上原 洋允 (昭32一法卒)
- 大西 喜代 (昭25専一法卒)
- 八木 広二 (昭30一法卒)
- 鷹取 重信 (昭26二法卒)

なお本年度は昨年度に比べ一名増加している。

また公認会計士試験には

- 松本 重一 (昭1613二専商)
 - 石崎 正雄 (昭32二商卒)
 - 熊木 利隆 (一法)
 - 大塚 恭朗 (昭33一法卒)
 - 児子 進一 (一法)
 - 馬谷 武一 (一法)
 - 奥野 武一 (一法)
- が、大阪府人事委員会に上級試験には、
が、大阪府人事委員会に上級試験には、
がそれぞれ優秀な成績でパスした。



大学祭

恒例の大学祭は、本年度第二十九回を数え、十月十八日(土)、十九日(日)の両日千里山学園で開催された。

第一日目(十八日)はあいにく秋雨に明け、第一会場の第一グラウンドを濡らしたため、ここでのパフォーマンスは中止されたが、第三会場(第一学舎講堂)では弁論、放送劇、吟詩、邦楽、能楽、軽音楽、などで賑い、第二会場では弓道及び柔道、相撲、軟式野球、フエンスンク、軟庭、重量挙げが日頃の練習振りをみせて第一日目を終った。

第二日目(十九日)、夜来の雨もあがつて、ようやく秋色濃く、第一グラウンドでは校友職員のリクリエーション、高校招待陸上競技、剣道野試合など行われるうちに、大学祭を祝福する祝賀飛行でますます祭典気分を高潮させ、OB対現役ラ

グビーに先輩後輩の連繫を親密にし、恒例の仮装行列は人気をよんで、観衆の拍手を浴び、夕闇せまる頃土人踊、フアイアストームに名残りを惜しみつつ、両日に亘った大学祭はカレンツシ・ライフの華と咲いた。

学園祭

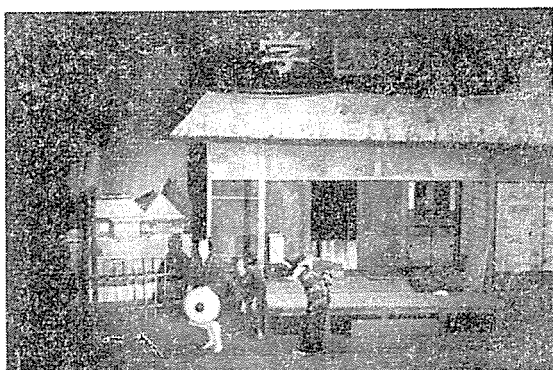
二部学友会の学園祭は、十月二十二日の前夜祭を皮切りに、続く二十三、二十四、二十五の三日間天六学舎において、華々しく開催された。

前夜祭には、第一会場(三十六教室)で「豊かな学園生活」というテーマでシンボジウムが学究的な雰囲気でも幕を切り、明けて

第一日目(二十三日)は第一会場で、開会式後軽音楽、混成合唱、民謡、吟詠、弁論、邦楽が、第二会場(体育館)で空手O・B紅白、フエンスンク紅白、卓球各試合が行われる傍ら、第三会場(校庭)で応援団乱舞、第四会場(四十二教室)で英語弁論大会が催された。

第二日目(二十四日)は第一会場で、定評のある古典演劇部が歌舞伎「伊賀越道中双六」と、学窓座の「三角帽子」とが好技を競い、第二会場では拳法、ボクシング、バドミントン各試合を行われ、第四会場では静かにレコードコンサートが催された。

第三日目(二十五日)は第一会場で、南博毛利与一両氏の講演の後映画、第二会場では剣道紅白、柔道経大対桜、試合が気合の入ったところをみせた。かくて、二部学友会各部を総動員しての多彩な学園祭の幕を閉じた。



古典演劇部

陸上競技部

大阪学生陸上選手権大会戦績

(八月三十日・中モズ競技場)

- ▽百米 ①野村 十秒九 ②武内 十一秒三 ④河野
- ▽二百米 ①八島 二十三秒二 ②岸本 二十三秒四
- ▽四百米 ①宮武 五十二秒五 ③堀五十三秒八
- ▽五千米 ⑥馬場(重)
- ▽百十米ハードル ③香江 十六秒二
- ⑤栗山
- ▽四百米ハードル ①宮武 五十九秒三
- ②栗山 六十秒一 ④堀
- ▽四百米リレー ①関大(野村、武内、八島、河野) 四四秒六

▽走幅飛 ①吉本 六米八十一
▽砲丸投 ③矢代 十一米九十一
十四名出場中、二名落選、以上十二名は去る九月十四日の近畿選手権に、大阪代表として出場した。

(九頁より)

一桃会総会

一桃会では本年度総会を九月二十一日(日)午後二時から千里山大学ホールで開催。

当日は会員十四氏が出席、旧いアルバムを囲んで懐旧談にふけつたり、また来賓水谷揆一氏、山本順広氏と懇談した。面目を一新した学舎を見学、記念撮影ののち懇親会に移り飲談ののち学歌と会員浪江源治氏作詩の学生歌を斉唱、万才を三唱して閉会、一同夕暮の学舎をあとにした。

当日出席者

- 来賓 水谷揆一、山本順広
- 会員 石渡俊一、浪江源治、上村静馬、秋山源蔵、藤井勝蔵、中島平吉、札野茂次、和田栄太郎、山田義雄、小寺藤作、戸川喜夫、荻茂雄、池尾良三、谷原九三蔵

六念会総会

大正六年卒業の校友で組織されている六念会では九月二十七日(土)午後四時半から千里山外苑、教育会館において本年度総会を開催。

当日は帰朝早々の武田蔵之助氏が来賓として出席、欧州視察談を一時閑余りにわたつて述べた。このあと一同屋上にでて折から中天に昇つた仲秋の明月を賞で、記念撮影ののち懇親会に入つた。一同至極元気で朗らかに会は進み、記念に色紙に寄せ書きして散会、明月を仰ぎつつ帰路についた。



校 友 パ ツ シ

校 友

友

九 月

校友会本部の動き

今月は暑い夏もすぎ、ようやく支部活動も活発になり、本部からも総会時には出席して、校友会事情等の説明をする一方、年間最大行事である本年度定例校友総会を控え、各部会はじめ常議員会、代議員会も開かれた。又、南勢支部に於て軽音楽と講演の会を地元教育委員会と共催、昨年の岡山開催について成功を取めた。

四日 部長会・正午、清交社

六日 軽音楽と講演の会・午後二時、松阪市公会堂・山崎教授、榎本、長柄両副会長、門上組織部長出席

七日 岸和田支部総会・午後二時、宮本町会館・久井専務理事、榎本副会長、門上組織部長出席

十一日 常議員会・午後五時、清交社
十五日 事業、組織懇談会・午後五時、清交社

十五日 広報、機関紙開大「第四〇号」
(九月号) 発行

十六日 教育後援会との座談会・午後五時、清交社

二十一日 一桃会総会・午後二時、大学

ホール・水谷教授出席

二十一日 修士会総会・午後一時、大学院

二十二日 代議員会・午後六時、大同ビル

二十四日 広報部会・午後六時、天六学舎

二十七日 六念会総会・午後四時半、教育会館・武田蔵之助顧問出席

松阪で軽音楽と講演の会

校友会組織部が中心となり三重県南勢支部と共催で、松阪市内にて軽音楽と講演の会を開くことを計画、協力して準備を重ねた末、九月六日(土)午後二時から松阪市公会堂で開催した。

この日は地元校友、一般市民、各高校生ら約七百名が来場し、湯浅支部長の開会の辞に続き、榎本副会長の大学、校友会現状報告があつた。そのあと門上組織部長が「欧州・中近東をめぐりて」と題して講演、ここで関西大学軽音楽部ロッキーマン・ブラザーズ、シルバー・ムーン・ハワイアンズが出演、おなじみの十数曲を二時間にわたる演奏、ヤンヤの拍手喝采を受けた。会場ではつづいて長柄副会長が「中小企業経営について」その諸問題を扱って講演、最後に山崎紀男教授が「アメリカ人の考えかたと日本人の考えかた」と題してアメリカ人の国民性と日本人のそれとの比較を興味深く講演した。プログラムはこれで終了したが、少

懇のち映画「関西大学」を上映、盛会裡に終了した。

なおこのあと近くの「翠松閣」で南勢支部総会を開催、近隣支部や在学生の出席者もあり四十数人を数え、盛会をきわめ、懇親を深めた。

岸和田支部総会

岸和田支部では九月七日(日)午後二時すぎから市内「宮本町会館」で本年度総会を開催。

会幹事長岸田久馬氏の司会で開会、支部長辻野新一氏の挨拶のあと、前年度会計報告を一同承認、議事を終つた。この総会には大学から久井専務理事、校友会から榎本副会長、門上組織部長が出席それぞれ祝辞をのべた。ここで一同膝をつきあわせて懇親の宴を開き、記念撮影、学歌斉唱、万才三唱をもつて閉会した。

常 議 員 会

本年度定例校友総会開催に関する件等を審議する常議員会は九月十一日(木)午後五時から清交社で開かれた。

席上総会開催日程については協議のうえ十月十八日(土)とすることに決定した。これは総務部案として提出されていた十一月二日または九日とする案を根本的に改め、大学祭と同日に行うことに決つた。会場としては第三学舎講堂があつた。議題としては前年度事業報告、同収

支決算報告の外、会則一部改正案などが上提される。この外に音楽演奏、講演が計画されている。常議員会は最後に代議員会開催日程を決定し閉会した。

教育後援会との座談会

校友会では同じ関西大学の外郭団体である教育後援会との間にこれまで公式な話合の場がなかつたため、事業部が主催し九月十六日(火)午後五時から清交社で座談会を開催した。当日教育後援会側は石井会長はじめ六氏が出席、校友会側も榎本、長柄副会長、村上事業部長以下五氏が出席今後お互に認識を深め、大学を含む、三者の発展に資するため協力してゆくことを約し、午後八時散会した。

当日出席者

教育後援会側 石井寿一 会長、大畑徳彦 副会長、土井政雄、坂上昇、梅園彦九郎 各常任委員、山本順成 幹事長、森本浩一郎 幹事、校友会側 榎本信雄 長、柄金吾、村上相三、河内雅三、木村吾郎、塚田正則 如下版

代 議 員 会

本年度校友総会に関する件、会則一部改正に関する件その他を審議する代議員会は、九月二十二日(月)午後六時から大同ビル八階ホールで一六三名の出席を得て開かれた。その結果校友総会開催については常議員会の決議を異議なく承認、会則改正については小委員会を設けて再検討することに決議し午後八時半閉会した。

(八頁)

關西大學七十年史

A5判 本文 七〇〇頁 特製上質紙使用

資料編 一五四頁 布クロス美装

口絵 五七頁 函入

内容目次

- 第一章 関西法律学校の創業
- 第二章 河内町興正寺時代
- 第三章 江戸堀時代
- 第四章 福島時代
- 第五章 福島、千里山時代
- 第六章 千里山及天六時代
- 第七章 新制大学の時代
- 資料編 (関西大学七十年史年表その他)

刊行 關西大學

「關西大學七十年史」は、関西大学創立七十周年記念事業の一つとして企画されて以来、修史に、編集に、遺憾なきを期して着々進められていたが、この程完成をみましたことは御同慶に堪えません。本年史御希望の方には実費金壹千五百円(送料共)にて御頒布いたしますから何卒、大学出版部まで御申込み下さる様お願いします。

刊行取扱 關西大學出版部

關西大學教授 壹井義正編
關西大學東西學術研究所員

關西大學泊園文庫藏書書目

第二編

A5判 二八〇頁
布クロス上製

大阪の庶民学苑を築いた藤沢東岐、南岳、黄鵠、黄坡先生と三世四代相繼がれた泊園書院の藏書を黄坡元本学名譽教授故藤沢章二郎先生が長年の縁を以て本学に寄贈せられたが、本書はその貴重な藏書書目の第二編である。なお、第一編は目下印刷過程之中である。

目次

- | | | | | | | | | | | |
|-------|--------|---------|--------|----------|------------|----------|----------|----------|------------|-----------|
| 卷一 經部 | 第一 諸經類 | 第二 易類 | 第三 詩類 | 第四 書類 | 第五 禮類 | 第六 春秋類 | 第七 四書類 | 第八 孝經類 | 第九 諸經總義類 | 第一〇 小学類 |
| 卷二 史部 | 第一 正史類 | 第二 諸史類 | 第三 載記類 | 第四 詔令奏議類 | 第五 伝記類 | 第六 地理類 | 第七 職官政書類 | 第八 書目金石類 | 第九 史鈔史評史料類 | 第一〇 図表地圖類 |
| | 第一 諸子類 | 第二 諸子合刻 | 第三 諸子類 | 第四 諸子類 | 第五 諸子類 | 第六 諸子類 | 第七 諸子類 | 第八 諸子類 | 第九 諸子類 | 第十 諸子類 |
| | 第一 楚辭類 | 第二 別集類 | 第三 總集類 | 第四 尺牘類 | 第五 詩文評詩文話類 | 第六 詩典小說類 | | | | |

刊行 關西大學出版部
刊行取扱 關西大學出版部

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十三年十月三十日発行(毎月一回三十日発行)

關西大學學報 第三二〇号 十月号

編集兼 久井忠雄 発行所 關西大學出版部

大阪市大淀区长柄中通一丁目

電話堀川(35)二〇七二番
振替大阪(二六)七二七二番

印刷所 株式会社サニワ印刷所
電話(35)七二七一